

《座談会》

出席者（ABC順）

女子大学教授 石 田 章

国際高等学校帰国生徒相談センター

主 事 小 浜 香 代 子

大学経済学部教授 岡 田 妙

大学文学部助教授 クラウス・
シュペネマン

高等学校教諭 津 田 能 人

（司会）北 垣 宗 治
（大学文学部教授）

同志社の 国際交流の新機軸を語る

ねらいは何か

北垣 きょうは、「国際交流の新機軸を語る」ということでお集まりいただいたわけでございます。じつは一九七八年、「同志社時報」の六三号で、国際交流についての座談会がございました。あのときからすでに四年以上たちまして、その間、同志社にも、国際交

流の観点から見ても相当な変化が起つてきたように思います。一つは、同志社国際高校ができたということで、これは非常に大きな前進です。それからサマー・プログラムですが、同志社大学ではアーモスト大学に三〇人ぐらいの学生を送るというプログラムを七九年の夏にスタートさせまして、それ以来毎年送って今日に至っております。女子大学でも

一年遅れて八〇年にスタートさせられまして、ヴァージニアにあるメアリ・ボールドウィン大学にお送りになっております。それから中国との交流が始まったということも、この間における非常に大きな新しい出来事でございます。上野総長が中国の大学を訪問されましたし、また松山学長も訪問されております。中国から留学生が来ておりま

すし、また中国人の方が、中国語を教える講師として、すでに来ておられます。

また岩倉には、同志社大学のそういう先生をお迎えした場合に宿泊していただくためのゲストハウスである岩倉ハウスが完成しております。ただ思いつくままに挙げてみましてもそういった状況がございます。

国際交流は教育の面と、研究の面に分けることができると思うのですが、同志社全体としてどちらのほうがより重要かと言いましたら、やはり教育の面ということになるでしょうね。国際交流の原点は、同志社の場合には新島襄の海外渡航、そして一〇年間にわたる海外での経験、アームストやアメリカン・ボードとかかわりといったようなことになっているわけですが、こういう国際化された時代において、これからどういう心構えでいったものか、現在どういう問題点を先生方は感じていらっしゃるか、そういったことで自由に発言いただけたらと思います。

シュペネマン先生はドイツのご出身で、奥様は日本の方でございます。そしてお子様を国際高校にやっていたらっしゃる。文学部で哲学をご担当でありますが、先生から口を切っ

てくださいませんか。

シュペネマン 確かに四年前に比べれば、国際交流はずいぶんふえたと言えるでしょうが、私自身にとって疑問になるのは、その目的、ねらいはいったい何かということです。考えてみますと、ある程度まで偏りがあるわけですね。一方ではアメリカとの関係が組織されて、他方、ヨーロッパとの関係もある程度までできて、また中国との関係もできまして、もともと中国は最近ちょっと流行になってまいりました。ところが、いちばん近い国である東南アジア諸国との関係がほとんどありません。私が知っているかぎり、韓国、フィリピンなどという関係をつくる動きもあまりないようです。

私は日本の歴史はあまり詳しく存じておりませんが、歴史的にみますと日本の近代化の過程に国際化を忘れることはできません。最近同志社で国際交流に重点を置こうという動きがあるのはその続きではないかと思えます。したがって、その国際化の中心は日本だということですね。ところが、いまの国際的な現状を考えますと、ある程度まで世界は一つになりつつあると言えるかもしれません。そ

れだからこそわれわれは自分の国、すなわち、ドイツまたは日本という国の立場から考えるよりも、ほかの国の立場から考えるべきではないかという気がします。具体的な例を挙げますと、これからやるべきことの一つは留学生の派遣ですね。留学生をアメリカまたはドイツへ派遣するよりも、フィリピン、韓国などへ派遣したほうが本当の国際交流になるのではないかという気がします。

北垣 非常にいい問題をもっと最初に出していただいたと思います。ねらいは何かということは、確かに重要な問題です。そしてまたアメリカに傾いている、これは同志社の出発からしてやむをえないことでしたし、別に恥ずべきことではないと思いますが、いつまでもアメリカ・オンリーということでは問題でしょう。東南アジアなど、ほんとに近くのことを知らないことも事実です。

小浜先生は国際高等学校の帰国してきまして生徒の相談係として相談センターにいらっしゃるわけですから、その辺からいかがでしょうか。

日本語教育の機関



小浜香代子氏

小浜 いまシュベネマン先生がおっしゃったように、確かに東南アジアとの交流が非常に少ないと思います。私が同志社におりましたときは、かえって戦争中に派遣されたインドネシアからの留學生がそのまますつと居ついて、同志社の社会学科なんかにおりました。私はちょうど戦後、英文学科にいた関係上、そういう方たちと交流が深かったわけですね。

私事で申しわけないのですけれども、タイ国に私は四年半おりまして、その間、私たちのためにいろいろ世話をしてくれた男の子を一人、一〇年間世話をいたしました。その子を、私は同志社の卒業生だからぜひ同志社へ入れたかったですけれども、まず日本語の問題が関係してくるのでして、そういう意味

からは近畿大学は非常に東南アジアに対して理解がありまして、日本語のスペシャル・スクールというのをつくって、そこへどんどん入れているんですね。同志社にもしもそういうものがあれば、すつとそこへ入れられたのですが、その子はメカニカル・エンジニアリングを専攻するため結局近大へ入れなければいけないようになりました。もし同志社のなかに日本語のトレーニングをする場所があれば、その問題は非常に早く解決するのではないかと思います。何はともあれ、テクニカルな問題を解決しなければ、留學生受け入れというものはたいへんむずかしいと思います。いま私のほうの学校では、二人韓国の學生が来ております。これははっきり申しまして帰国子女の枠のなかからはみ出したことにはなるのですけれども、一応親が日本の永久ビザを持っている関係で二人入れております。

私どものほうでもやはり問題となるのは日本語の教育でして、外国へ行きますと、イングリッシュ・アズ・セカンド・ランゲージというコースがありまして、英語圏以外から来た子どもたちを集めて、そこでもって英語の

トレーニングをしていくわけですね。ですから私どもの学校でも、できればジャパニーズ・アズ・セカンド・ランゲージというようなコース、あるいはインスティテュートと言った方がいいのですが、そういうものをつくって、そこでまず徹底的に日本語をトレーニングさせる。そしてアートとか、あるいはミュージックとか、あまり日本語を必要としないものからどんな単位を取らせていく。そういうふうなことを、アメリカのハイスクールなどではしているわけで、できれば同志社にも絶対的に日本語をトレーニングする学校をつくってほしい、それによってまず外国留學生受け入れの第一歩が踏み出せるのではないかと思います。

北垣 いまおっしゃいました同志社に日本語センターと申しますか、日本語学校と申しますか、そういったものをつくる必要があるということとは、四年前の座談会にもちょっと顔を出しております。これは同志社が真に国際的に役に立つというふうに決断するのであれば、おっしゃるとおり真っ先にしなければならぬことだろうと思います。

振り返って恐縮ですけれども、新島先生



岡田 妙氏

は、無知蒙昧な状態にあり、道徳的にもだめな日本の三、三〇〇万の国民が目が開けて近代国家として立ち上がれるようにということ、そのための基盤となるような人間を養うために同志社をつくったのですが、いまは日本も重要であるけれども、世界に対して同志社の卒業生は何ができるかという、そういう視野をもたなければならぬ時代になっているわけです。そうしますと、やるべきことは、日本語教育ができるような機関をつくることであるということになるかもしれませんね。

岡田先生は、言語学のご専門でもありません。アメリカのみならず、フランスにも行っていらっしゃいますし、その経験を通して、どうぞご発言ください。

岡田 それぞれの国に特徴のある国際交流の形というのは、歴史的必然としてできているのじゃないかと思えますので、アメリカはアメリカ型の努力のしかたがあり、ドイツはドイツの形があるし、日本にも日本型というのがあっていいのじゃないか。さっきのシュベネマン先生の、ねらいは何かということですが、一私学である同志社が、同志社の国際交流はこれをねらいにして、こういうふうにつくるのだということがあれば、それならそれに合わせて日本語学校を学内につくるべきだとか、あるいは法人としての同志社にあるべきだとか。これはなにも学生さんのことだけ考えなくても、外国からお見えになる客員の先生も含めたり、あるいはそのご家族とか、いろんな方のことを考えられると思うのです。そういう方たちの日本への順応ということも考えて、これはせっかくいらいしているわけなんです、同志社が何かにこ入れしてもいいのじゃないかと思えます。ただ、一私学としての同志社が何もかもやらなくてはいけないのかということも、これはいろいろ意見のあるところだと思いますから、やはりねらいを定めて、同志社の特徴が前へ出るような形

でやる。

とにかく国際交流はやればいいものだった時代は過ぎていくのじゃないか。いままでは国際交流が量的に少なかったですから、何でもいい、できることからやればよかったわけなんです。今後は量的な交流そのものはいろんな形でできるようになってくると思いますから、法人としての同志社が、どの種類の活動を、どういうふうに通成していくかということを考えなければならぬところへ来ていると思いますね。

北垣 やはりシュベネマンさんが最初におっしゃった、ねらいは何かということが、将来のことを考えるにも最も重要なポイントですね。ことに新機軸ということをまず言われているので恐ろしいのですが、同志社高校で音楽をご担当の津田先生、いかがでございましょうか。

何となく国際的

津田 ちょっと問題がむずかしいので、私はよくわからないのですけれども、昨年でしたか、新聞で、国際交流とか国際性という言葉について読んだことがあるのですね。大阪



津田能人氏

のテレマン・アンサンブルの指揮者で延原武春さんという人なんです、彼が新聞にエッセイみたいなものを書いてまして、日本の国際性というのがいままでどうだったのだろっかということについて書いてあるのですが、日本は、さきほどのシュペネマン先生のお話にもあったんだけど、とにかく国際的な人間をつくっていくということは、例えばグリーがどこかへ行ったとか、いろんな所へ行って世界各国を回ってきたり、あるいはうちの生徒がたくさんこの所に行つて国際的に活躍しているというふうな、一つのバロメーター的な見方でもってそれを国際的であるということが、そうじゃないんだと。外国人を日本人が受け入れていくことをしないで、本当

の意味での国際性ということはないんだというようなことを彼が言つてたんですね。よくはそのときに、なるほど思つたんです。

こんなことは皆さんよくわかつていることだと思つので、別に言うことはないのですけれども、ぼくなんかの学校を見ていても、何となく国際的になつてきたとか、そういう言葉を乱暴に使うだけで、やはりさきほどの話じゃないんですけど、いかにして東南アジアの人たちを日本のなかに取り入れていくか、あるいはヨーロッパの人たちとどのように関係していくかというふうな、受入れの態勢のほうをもう少し考えていったほうがいいのじゃないかと思ひますね。

北垣 女子大学の石田先生、お願いします。

国際交流センター

石田 いま個別の大学であるとか、あるいは同志社に限つて言ひましても個々の学校で何かプログラムをつくつてやるということでは、現にすでに行われているわけですが、そういうことをなにか突き抜けて、例えば京都なら京都のいくつかの大学が共同してプロジ

ェクトをやれないものか。そういうものが一方にあって、なおかつ同志社でなければできないことを個別の問題としてやるようにしないと、それぞれの大学とか学校のエネルギーが分散しちゃつて、一つの大きなものになつていけないのじゃないかという気がします。

ですから、せめて同志社のなかに国際交流センターとか、いま日本語のことが出ましたけれども、語学だけでなく、学問的な研究も含めて、各学校が共同利用できるセンターのようなものがつくられたらいいという気がするのです。田辺にそういう新しい施設はつくられないのですか。

北垣 田辺をどう使うかは検討中です。そういうことも案として出てはおりますが、聞いていらっしやいますか。

岡田 いえ、何も聞いていないのですけれども。すでにもうかなり、東南アジアも含めていろんなところから留学生が来てはいるんですよね。同志社の学内に。中国語の先生も来ておられる。そういう方たちを日常あまりうまく活用してないんですよ。せっかくおいでになっているのに、その人たちから何かを吸収することを育む場所というか、接触の



北垣宗治氏

場所とかお膳立てがしてないのですね。せっかく同志社へおいでいただいたのだから、同志社の教職員や学生たちがもっと吸収できるようなお膳立てを積極的に考えていかなければいかんと思いますし、そうして友達ができるなかで日本語もインフォーマルに教わっていく。もちろんきちっとしたカリキュラムで教室で教えるということも考えた方がいいのですけれども、インフォーマル・エデュケーションというものの効果も大きいと思うので、こういうのは助長していかなくてはいいけないですね。

北垣 ファカルティ・クラブのようなものが、こういう問題になるといかにだいじであるかということを痛感しますね。そこへ行けば昼の十一時半から一時ごろまで、だれか

かれか来て食べている。そしていろんな人が小さなグループをつくって、食べながら話している。そういう雰囲気やはり本当は基礎になる必要があります。国際交流というのは一緒に食えることなんかが基盤にならなければならぬと思うのです。

国際的な教育とは？

ところで、同志社は教育機関ですから、全同志社を含んで考えなければならぬと思うのですね。と申しますのは、いま同志社で教育を受けている生徒たち、学生たちが国際的なものの見方ができるようになるということ、二十一世紀をめざしている以上はどうしなくては必要なことだからです。平和の問題一つを考えてみましても、戦争してはいけないわけですし、それには国際的な理解というものがまずなければいけない。それをずっとたどっていきますと、日本人であるということと、それから国際人である、あるいは世界人であるという意識、世界観、歴史観、人生観といったものを、どうやって学校で植えつけるかという問題になりはしないでしょうか。シュベネマン 確かにそれはいちばん重要

な課題だと思えますね。変な例になると思いますがそれでも、自分の例を挙げますと、私は一年間アメリカに留学して、そこで初めて自分の社会と文化を外から見ようになったわけです。そしてドイツに戻って、一〇年間ドイツにいて、それから日本に来て、日本は一年以上ですが、そこでやはり考え方が変わったということだけでなくて、私は人間として変わったことです。当然なことにドイツ人です。自分の文化と社会を乗り越えることはできない。あまりにもドイツ的ですから、同僚の先生はみな困るわけですけど、私はドイツ人である自分は本来的に変わらないけれども、やはり変わった。人間として変わる。私はこれは、こういう国際的な教育を考えますと、頭ではかの国のことを理解するということだけじゃなくて、そこに行って問題とぶつかって、よく苦勞して、ある程度までそこで人間として変わって、そしてそれをまた材料にして勉強することですね。それが国際的な教育だと思えます。

だから同志社ができることは、またやるべきことは、学生をできるだけかの国へ送って——まあ、これは将来のことですけども



クラウス・シュペネマン氏

ね、そこで最低一年間苦労してもらおうということ。最低一年間はかの国で勉強しない学生は、これからはもう卒業できないとか。ちょっとラディカルで、当然なことにあとの具体的な問題を考えますと大変なことになるわけですけど(笑)。

北垣 新機軸というタイトルにふさわしいラディカルな発言をしていたいたわけですが、いまのご意見に反対の方はありませんでしょうか。と申しますのは、私はちょっと反対論を述べてみたいのですが、基本的に賛成したうえで、少し反対したいのです。基本的にはそれは確かにいいことだと思いますが、一万七、〇〇〇人もおる大学が、ジュニア・イヤー・アブロード式にどうやってそれだけの数をよそへ出せるだろうかということを考

えると、気が遠くなります。しかしいま、たった三〇人をアモストへ送っている、これは少なすぎるじゃないか、その中間の数は何だろうかというふうなことを考えるわけですね。

もう一つは、シュペネマンさんのいまのご意見に賛成したうえで言っているのですが、外国に行ってきたても、いまおっしゃったような意味でみんな体当たりするかどうか保証がないのです。外国に行って、いっぺんも英語をしゃべらずに一カ月、二カ月過ごすことはいま可能なんですね。そうではありませんか。スーパードーマケットに行けば欲しいものは、ものを言わずに取ってきて計算してもらって払えばいいわけですから、「サンキュー」だけ言ったらいいわけですね。

ぼくは外国に行ってみて、いまおっしゃった意味での体当たりをしない留学生をほんとにたくさん見てきました。何しに來ているのだらうと思うような日本人を、非常にたくさん見てきました。日本人は基本的には引込み思案でシャイだと思います。一生懸命に外国人とつき合おうとする日本人はむしろ少ないのであって、普通は引込み思案です。そ

ういう国民性が一方においてある。これは長い鎖国の影響でもあると思っていますけれども、そういう人々を、いまおっしゃいましたように一年間外国にやるということで、はたしてどんな効果があるだろうかというのが私の率直な疑問です。

シュペネマン 人数の点は確かに問題ですね、よくわかりますがね。半年外国で遊んで、何にも修得できない学生も確かにあります。アモスト・サマー・プログラムは、正直に言いますとアカデミックな観光ですね(笑)。ところが、国際高校でかなり長く外国にいた生徒を見ますと、なにかその性格と考え方が変わった、日本人でありながら、人間として変わったと。これは勉強だけではない、やはり経験だと思います。

私は、そういう外国での生活を経験させる方法があるのではないかと考えています。具体的に言いますと、例えば東南アジアで三つくらいの大学を探して、そこで交流プログラムをつくって、年に五、六人の学生でもそこに派遣できれば、そしてむこうで受け入れる組織があればいいわけです。

北垣 石田先生、女子大のサマー・プログ



石田 章氏

ラムの学生を連れていらして、三週間勉強、一週間ホームステイ、一週間旅行、そういったことをいろんなものをつかんで帰ってきた、その効果に関して少しご意見を……(笑)。

石田 シュペネマン先生がおっしゃることはよくわかりますけれども、外国に行くという場合に、個人で行くレベルの留学と、学校なら学校がやる場合の研修というのは当然ちがうと思いますね。一万何千人の学生を全部ということは物理的にまず不可能ですし、大学がやるとすれば、個人レベルでは一年間の奨学金を与えての留学生制度で、厳選された特定な学生が何人か行くということしかない。そうでなければ同大や女子大がやっているような、ある短い期間——うちの場合は三

十五日間ですけれども——プログラムをあらかじめ組んで、それにのっとって、そのなかでの最大限の効果を求めるようなやり方しかないと思いますね。

ばくは、効果というものはそんなにすぐ出るものじゃないと思います。むしろ長い時間のなかで、何かの形で自他にその経験が還元できればいいと思っています。

ただ、サマー・プログラムについて一つだけ言いますと、あまりにも恵まれすぎた、あるいはアメリカのなかでのいい面だけを見て帰るといふきらいはあります。私どもの行っている所はヴァージニア州の小さな田舎町でして、町の人もたいへん親切ですし、治安状況もよく、そこにいる間はなんの不安もないわけです。ところが、そこからニューヨークへ行きますと学生の顔色が変わります。でも考えてみますと、ヴァージニアの平穏な所がアメリカなのか、それともニューヨークの汚くて、危険極まりない、そういう現実がアメリカなのか、どっちが今のアメリカだっていますと、必ずしもヴァージニアのほうがアメリカだと言えない現状がいまはあるでしょう。だから、危険を覚悟でショックを与える

ことのほうが、なまのアメリカの現実を知ることになるでしょうが、学校のこういうプログラムではそうもいきませんからね。

そういう意味ではサマー・プログラムというのも、一つの海外体験の一面にすぎない。そういう限界はありますけれども、その限界をわきまえたうえであれば、その意義は大きいと思います。

北垣 岡田先生、いまと同じ意味で、アーモストの経験をお願いします。

岡田 私たちもそんなにすぐに効果を期待していたわけじゃないのですけど、意外とすぐに効果があるのですよね。これは国民レベルが外国経験に対して免疫も何もない、白紙レベルに近いのじゃないかということがほんとによくわかるのですけれども、すぐにある種の効果があって、このあいだも二年前に行った連中が集まりまして、いまだどうしているか、何を考えているかなど、ざっくばらんに聞いてみるのですけれども、やはりシュペネマンさんのおっしゃるように、人間がどこか変わった。期間も短いし、制度によって守られた状態ですから、ほんとに肌身で何もかも吸収するという状態ではないけれども、一

つのきっかけとして効果は絶大だし、それから繰り返し外国へ出かけていくための足かりとしては、いまの日本の国民レベルですと、やはりああいうものが片方でなければいけないと思うので、三〇人が四〇人、四〇人が五〇人というふうになるように、積極的に考えていかざるをえないのではないか。

それから、クラブなんかで大いにいろんなことをやっているわけです。オーケストラで行った、グリーで行ったという学生さんにも私は過去にも接触していますけれども、そういう人たちが得てきたものとまた別なものが確かにあります。あれはあれで置いて、また別なことも考えていかなくちやいけないのではないか。

ただ私はさっきも言ったように、国際交流というのはやればいいんだと、やることについてなんの疑いもなかった過去の状態とは変わってきている。技術的な面ばかり、とにかく量的に交流さえしていけばいいというものじゃない。だから外国人のものの考え方とかそういうものを吸収さえすればいいということじゃなくて、吸収してどうするんだということだと思ふのですけどね。

中・高教員の留学

小浜 お二方からいろいろ帰国生の問題が出ましたが、私のほうはいまシュベネマン先生がおっしゃったように、十年以上もブラジルにいたという子どもがおります。その子は確かにどこか変わっておりま。変わっているというのはつまり、日本的な考え方からですね。私自身は帰国おとなで、十何年間というものの外国へ行ったり来たりしております。そういう子どもと話しているほうがスムーズに会話ができるように思います。そしてあの人たちがもっているバックのフィーリングというものがわりかしびた、びたとくるんですね。

いま大学生の留学云々という話がありまして、高校のレベルでやったらいいのではないかと。というお話もありますが、私のほうは帰国生が多いので、一般生もそれに刺激を受けてAFSとかいろいろなプログラムで自分たちから行こうとしている子どもはいっぱいございます。それもないへんいいことだと思ふのですけれども、いま同志社でも高校・中学校の先生方の留学というプログラムはあります

か。私はあまりないよううかがっておりますが。私どもの学校は帰国生を預かっているのですから、少なくとも半数ぐらいの先生方が、一年間以上の経験をしてきてくださると、もっとプログラムなんかを組むうに彼らのニードに合うものができてくるのじゃないかしらと、痛切に感じております。

北垣 いまおっしゃいました中学・高等学校の先生方がどれぐらい外国にいらっしゃった経験があるか、また学校として派遣するようなことをやっているのか、という問題なんです。津田先生、その辺はいかがですか。

津田 私は今から七年ほど前に、ドイツ政府のDAADの奨学金をもらいまして二年間ドイツに行っていたのですけれども、そのときは自分自身まだ三十そこそここの年で若かったので、大学生としてむこうの大学に入ったわけですけれども、当時、留学制度というのは実際はなかったんですね。生徒たちはたくさんさきほどの話じゃないですが、AFSとかいろんな形で出て行くのですけれども、先生にはそういうのではないというわけで、これは少し野心をもって一年間ぐらい行ってやるうと思つて、たまたまそういうふうな奨学金が

あたりまして行けたのでありますけれども、そういう制度は残念ながら中・高にはないのですね。

うちの高等学校では、一昨年でしたけれども、留学に関する規定といったものを、私を含めて検討する委員会をつくりましてやっただけですけれども、中・高では実際問題として大学の先生みたいに一年間あるいは二年間有給でもって行けるというような恵まれた制度はないものです。いま一人アメリカに行ってる先生がおられますけれども、ほとんど給料なしで私費で行っている。そのかわり首だけはつながっているというふうな制度です。これは中・高ではしかなかったといえればしかたがないのかもしれませんが、同志社という学校にそういうふうな制度がないというのは、残念な気もしますが、やはり中・高段階では教育ということねらっておりますので、個人の研究というようなことはいまのところはできないような状態ですね。

北垣 同志社の国際交流ということを教育の面で本当の意味で生かそうとしますと、先生方にそういう経験を積んでいただくことは基本的なことでしょうね。

外国語教育の問題

ところで教育の面で国際的な目をどうやって養うかの問題ですが、やはり外国語を学ぶということはそのいちばん身近な手がかりだろうと私は思っております。外国語は外国人の先生に学ぶこともありますし、日本人の英語あるいはその他の外国語の先生に学ぶこともあるわけですね。その辺の観点からご意見をただけませんか。四年前の座談会で、私は自分の同僚に対して相すまないということをして前置きにして、同志社の現在の英語教育はあれでいいのかということを発表した覚えがございます。状況はその四年間で変わったかどうか、岡田先生、どうあらんになりますか。

岡田 変える努力というのは個人の教師がやはりしていると思いますが、もう個人のレベルでできることは皆さんやっていらっしゃるのじゃないかと思えます。私自身も誠心誠意やっているつもりなんですけど、やはりそれぞれの学校で制度的なバックアップを抜本的にやっていただかないと、これ以上はできないところへ来ている。オーディオルームをつくったりするハードウェアの方は、おい

いやっていくのではないかと思うのですが、問題はソフトウェアですね。一クラスに六〇人の学生がいて、これでもクラスとして、大学全体としては小さい、語学はぜいたくにやっているほうだというような考え方は、今後の問題はどうしても打開できない。

この前の座談会のご発言も私は読ましていただきましたけれど、やはり根本的な問題は、学生数対教員数がいまの現状では、何を变えようと思ったってどうしようもないのじゃないかと、また逆に言えば、教師に対して学生数をいまの半分にしていただければ、ほっといてもある程度のことができるような面もあるわけです。先日、アーモスト・フェローの方が語学のクラスをふらっと見にこられて、一步教室へ入ったとたんに、ウワァーと言ったんですね。そのクラスは、全学の英語のクラスとしては非常にぜいたくな、平均学生数がいちばん少ないE系列のクラスなんですけど、それで驚きの声をあげたのをうちの学生さんたちが見て、これはまた、たいへんショックであったわけなんです(笑)。だからもう、いまのレベルでご批判いただいたってどうしようもないのじゃないですか。

北垣 いまおっしゃいましたこと、私もそのとおりだろうと思います。ICUの話がよく例にあがるわけですが、ICUでは日本人の学生は一年目に英語のインテンシブ・コースを取らなければならない。海外から来ている学生は日本語のインテンシブ・コースを取らなければならない。それで一年間みっしり、毎日毎日鍛えられると聞いておりますが、同志社でそんな教育をしようと思ったら、いまの話からおわかりのように、学生数を二分の一にするか、三分の一にするか、あるいは教師の数を二倍、三倍にするか、どちらかなければそれは不可能だろうと思います。

岡田 教養英語の運営自身、私もいろんな種目のものをもっていきますけれども、種目によつては四〇分、真ん中一〇分、あと四〇分というようなやり方もやっているわけですし、九〇分じゅう同じ作業を課しているような先生もそれはいらっしゃるかもしれないけれども、語学の作業は中身を変えることはできるわけだし、いまの制度のなかでのくふうというのはできるだけやっている。だからこれを四五分の二こまにしようとか何とかと言

えば、必ず隘路は教員数の問題、教室数の問題といふところへくるわけですから、しかも嘱託講師にこれだけ負担をかけなければならぬ制度上の隘路がどうしたってあるわけですね。

北垣 たまたま『英語青年』の八月号が「日本の大学における英語教育」という特集をやっております。その巻頭のエッセイが渡部昇一さんのもので、なかなかラディカルな発言をしていらしてびっくりいたしました。

渡部さんに言わせると、日本のいわゆるグラマー・トランスレーション・メソッドは結局クラシックスを読みこなすようにする教育であるといふうに彼は規定するのですが、それを現在、英語の先生方が恥ずかしがって、いろいろくふうして、LLを活用してやろうとしているのは、それは努力は認めるにしても、いままでのグラマー・トランスレーション・メソッドを恥じるには及ばないんだといふことを盛んにおっしゃるわけですね。

日本には漢学と蘭学の伝統もあるわけで、本当に内容が読めて理解できる。オランダ語で会話はできなくなつて、オランダ語の医学の本は読める、あるいはドイツ語の哲学の本が

読める、英語のエッセイが読める、そして理解できる、そういうやり方を江戸時代から明治を通してやってきたから、外国の植民地になることなしに今日に至つたという議論なんですね。もしもこれが、ペラペラのオランダ語ができる人、英語のできる人、ドイツ語のできる人ばかりでやってたならば、たぶん植民地になつてただろうというようなことまで含んで言っているのだと思うんですが、本当の意味での突っ込んだコミュニケーションというのは、ただ日常会話のレベルだけではだめなのじゃないか。いまの複雑なコンピュータのノーハウというようなことになると、ほんとうにいろんなことをやらんならんでしようし、最終的な人間対人間の心の通いというようなことになる、非常にちがつたレベルまでいくのじゃないか。

そのように考えてきますと、外国語教育はどうあるべきかということに関しても、かなりの迷い、混乱が生じてきはしないか。価値観が多様化していればいるほど、そういった問題が起こりはいないかという感じがするのですが。

岡田 日常会話だけしかできないような外

国語能力ではどうにもならないですね。国際

交流というのは、挨拶などもさることながら、むしろそのあとが問題だと思えますね。

さっきおっしゃった人間がかわるというのは、

だいたい一つの要点だと思うのだけれども、

従来外国のことを習うというと、とかく芸術、科学、学術、技術、思想、宗教という、

人間の知力の結晶のようなものを吸収するのが主たる眼目であつたし、今後その点は変えてはいけない、そういう意味では、しっかりと

古典が読めるということとは絶対に必要なことだと思ふけれども、それと同時にさっきの

人間のかわる、無意識文化とか価値観の把握というか、相手の人間の動きや人間関係

の質的な側面がわかるというような点が実は大きい要素で、これは有名な先生を呼んでき

て話を聞けばわかるというような種類の知識ではないレベルのものですからね。古典を読

めるだけではもう一つの無意識文化のほうはなかなか身につかないわけですから、挨拶や

会話というレベル以上の運用能力というものがどうしたって必要じゃないかと思えます。

シュペネマン 英語に関して発言する資格

はないと思いますけれども、ドイツ語の様子は

を見ていつもびつくりします。

ちよっと同志社の悪口になります、二年

間一般教育のドイツ語をやった学生には根本的な単語、根本的な文法の知識がない。そし

てもうひとつ恐ろしいことは、ドイツ語とい

う言語の背景にある考え方とか文化なりについて全く知識がない。だから私の印象は、怒

られるかもしれないけれども、同志社のドイツ語——他の大学の第二外国語全部がそう

かどうか知らないのですけれども、少なくともドイツ語の程度は非常に低い。そして機械

的に言葉、文法の規則のみを教えて、その言葉のほんとうの意味とかその考え方、その文

化などを言葉を通して伝えられない。だからこれは今後の外国とのコミュニケーションの

土台にならない。

北垣 それは学生数が多いからでしょうか、教え方が悪いからでしょうか、それとも

学生のモチベーションがなっていないからでしょうか。

シュペネマン それはいろいろあるでしょうね。これは一つの理由だけじゃない。先生

にも問題があると思えますね。私は三年生の

独書講読を担当しておりますが、毎年学生の

レベルがかわるわけです。ある年はよくでき

ますが、ある年は全くできない。これはやはり先生の影響が相当あると思えます(笑)。し

かし人数が多くて、たしかに学生に学習意欲

がありませんという事実もありますよ。わり

あい熱心に外国語をやる人でも、単位を取る

ためだということをはっきり言っています

からね。ですから一つの理由だけではないです

ね。

小浜 私のほうの学校はスペイン語とドイツ語とフランス語があつて、いま岡田先生が

おっしゃったように、在住国でその国の人々と話した経験から、エブリデー文化みたいな

ものはすでに帰国生は身につけて帰ってきて

いるわけですね。ただ、文法がほんとうにめ

ちゃくちゃなんですよ。一、二年で文法をや

り直しますが、三年になりましたら、こんど

入学試験という問題がありますので、あたふ

たしているのですけれども、せっかく外国で

第二外国語を習ってきた子供のために、私は

それをつづけてやりたいと思うのです。でも

入試ということがありまして、第二外国語を

つづかせるところまでにはなかなかいかな

いという現状です。

北垣

アメリカの大学の例を見ますと、インテンシブ・コースというのは、月から金まで二、三時間を毎日毎日やっているのですね、日本語を学ぶ場合でも、中国語を学ぶ場合でも。それを通してこないと、日本文化、中国文化を本気になってやる者と認めない。そういう制度をつくっておりますし、フランス語をやる場合、ロシア語をやる場合もやはり同じパターンのように思うのです。それを日本では、教養英語式の伝統があるからですけれども、週一科目九〇分、それを前期十二回、後期十四回式にやって単位二単位式に運営しているわけで、ここには外国語教育に対する考え方の相違がはっきりとあらわれています。いま小浜先生のおっしゃったような、スペイン語をやってきた生徒をなお伸ばしてあげるようなシステムというものは今の制度の下ではむずかしいのじゃないか。女子大学では外国語教育に関して、どんな工夫をしていらっしゃるのですか。

石田 ことしから英文科は少しカリキュラムを変えました。特色といえるかどうかかわかりませんが、例えば、英文一年の英作文のクラスはこんなふうになっています。女子

大の場合は基本クラスはだいたい四十三、四名なんですが、それをまた二つに割りまして、だから二十二・三名、それをすべて専任教員が一年間もち、同時にアドバイザーのクラスというところでやっております。とにかく語学教育というのは、岡田先生がおっしゃったように人数の問題が第一条件ですね。何十名というような学生を対象にして語学教育というのは、まず不可能だと思います。外国語教育のためのインスティテュートをつくるというのなら別ですけども、いまのカリキュラムのなかでやろうとすれば、一クラス・サイズを小さくするというしかないと思いますね。

ただ、私学ですから、これもできることは非常に限られてしまうわけです。だから、たとえば英作なら英作と何か科目の目標を定めて、それを集中的にやるしかいまのカリキュラムのなかではないのじゃないか。

岡田 問題は大きいですからね。そして中学校からずっとあるわけだから、中学校の外国語教育から一貫して大学まで含めて広く考える。同志社の国際教育の根本は語学だということであるなら、制度的に全体を見直し

て、よほど慎重に考えて、投資もしてですね。抜本的に考えていかざるをえない。外国人のための日本語の教育だって同じだと思います。一貫して同志社全体として考えていかざるをえないと思いますね。

小浜 根本的に私は思うのですけれども、日本人というのは、もっとビジョンをもった方がいいのじゃないか。シユベネマン先生がいちばん最初におっしゃったように、普通のもの考え方とは少しかけ離れているかもしれないけれども、一つのビジョンを考えだし、それに向かっていく。同志社というのは長い伝統があるし、人間関係も非常に深いと思うので、なかなかむづかしい問題がたくさんあると思うけれども、なにか一つそういうビジョンをつねにもって飛躍していく必要があるのじゃないでしょうか。

交流の具体的問題

北垣 津田先生、高等学校では帰国生徒や外国からの留学生はどういう状況でしょうか。

津田 校長じゃありませんから、あまりえらそうなことは言えないのですけれども、昨

年でもAFSの学生を一人引き受け、彼は一

年間ずっと高等学校にいたわけです。それはたしかに大変でした。ある英語の先生がつき切りで、その先生が日本語まで教えられる。だいたいこちらのほうで特別なプログラムをつくりまして、この授業は出なさいというふうにして出やすいものは出して、それ以外はその先生が自由時間個人指導ですね。それで日本語をまず勉強させまして、その人は、日本語が一年間で十分しゃべれるようになりました。だいたい二、三名の人はうちの学校に常時いますね。それから逆にこちらがお世話になるアメリカとかオーストラリアとか、あるいはカナダとかに行っている高校生は十人ぐらいいるでしょうかね。年々そういう形でもってふえていることは確かです。でも、これはふえるからといって、高校の段階で喜ばしいことであるというふうなことは一概にはいえないですね。ここには大きな問題があると思うのです。たとえば大学への推薦の問題とか、十名となるとけっこう大きいですね。ただこれはいいことだというような形でもって高校でやっていくことは言えないのじゃないかとはよくは思うわけですけれど

も。

北垣 それは制度的にはたいへんいわく言いがたい問題も含めていろんなことがあるだろうと私も推測はできます。実は、国際交流というのは元来いいことにちがいないということなんですが、その衝にあたると人はいかに大変であるかということは、私も痛感しております。たとえば国際交流がいいからといって、現在同志社大学には毎年アメリカのいろんな大学から、うちの学生を派遣したいがどうでしょうかというオファーが来るわけですね。それを全部引き受けておりますと何百人という規模になって、そして夏休み中の同志社大学は、教室が満杯になるまでもっていくことができるかもしれません。でも、それじゃだれがその仕事をひきうつるのかということになると、結局先生たち一人一人それぞれの専門があり、専門以外にいろんな社会的な仕事をもったりして、忙しい人がますます忙しくなるという状況が一方にあるわけですし、それじゃ私引き受けましようという人はなかなかないわけです。同志社大学の国際交流委員会はその辺のことを調整なさる機能をもっていらっしゃるわけですね。従来のアー

モストとか、カールトンとか、ハワイ大学とか、そういったところは続いていくのですけれども、新たな申し込みに関しては、現在の同志社の力量からしてそこまで手はまわらんということと、これは切っていらっしゃるのが現状だろうと思います。女子大学にもそういう申し込みはありますか。

石田 あまりないと思うのですが、個人的レベルでの留学生というのはあります。こんど新島基金で女子大学にも一人中国から、これは家政学部の方ですけれども、来年の四月から受け入れます。

北垣 集団で夏休み一カ月お願いしますというの……。

石田 バージニアのメアリー・ボールドウィンという女子大学なんですけれども、そこが来年の夏、十五名くらい学生を女子大に送りたいと言ってきています。今月下旬にその責任者の方が女子大に來られて、交渉をすることになっているのですが、具体的なプログラムの検討はこれからつめてゆくわけですが、やはり言葉のことがいちばん問題になるのじゃないでしょうか。与えることというのは、比較的短期間ですから、京都という土地

柄を考えますと、それほど問題はないと思うのですけれども、ただアメリカでもバージニアというのはまだ日本人が非常に少ないのですね。日本への関心はあるのですけれども、実際には日本文化とか、ましてや日本語教育というのはほとんどまだ未知の段階ですから、はたして言葉の問題が克服できるかどうか、その辺がポイントになると思いますね。

国際交流はじゃまくさい

北垣 ところで「新機軸」ということが前面にはございますが、最初に出ましたように、国際交流のほんとうのねらいをどこに定めるかという問題になりますと、教育という面では、最大公約数的にいえますことは、今後の日本の市民としてそれぞれの卒業生がこの社会で働いていくためには、当然国際的な視野をもった人間として活躍しなければいけないのじゃないかと思うわけで、そのためには最低一つ外国語ができるということは基本的な資格だろうと思うわけです。したがって、その面から外国語教育というものに関しても、同志社はいままでとはちがった視点をとり入れるようにもつとがなばっていく必要

がありはしないかということがいえると思うのです。しかし、その基本はやはりものの考え方ということになりますので、開かれた大学ということがよくいわれるわけですが、開かれた大学をつくるのは開かれた人だという気がいたします。

ところが、私たちは考えてみると案外閉ざされた大学であり、閉ざされた人ではないのかという気がするのです。実は私、文学部におりますけれども、外国の方々と接触することをじゃまくさがする同僚が案外多いのじゃないかという気がしてしょうがないのですね。なかにか特別視して、そしてじゃまくさがする。そういったことはお感じにならないでしょうか(笑)。

岡田 じゃまくさがするでしょうね。

石田 たしかにそういう面はありますね。でも、そういう壁があるから、むしろその壁を乗り越えるのが異文化との接触であって、じゃまくさくなくなったら、ちよっとおかしいようにぼくは思いますよ。そういうものを乗り越えるところにやはり意味があるので、むしろそのことはだいいじにすべきことじゃないかという気がしますけれども。

岡田 つまり自分の枠を出たところで他人

の行動を理解したり、自分のわかつている範囲以外のところをわからなければならぬからめんどくさいのであって、そういうめんどくさい存在が世界にはたくさんいるわけだから、じゃまくさい経験をつみかさねる場所というか、せいぜいよい苦勞をさせる場所というものを学生さんのためにつくっていくのが国際教育の眼目じゃないか。苦勞を覚悟で自分の人間を改革しようという態度をつくっていくのが、語学はもちろんそうだし、あらゆる国際教育の根源じゃないかと思うんですけどね。

自分を客観視できる眼

シュペネマン めんどくさいという気持ちにはわかりますが(笑) いまおっしゃった問題の一つの側面は、自分の文化、自分の社会に対する態度——私はここで個人的な立場からしか説明できませんが、私が高等学校へ行ったとき、五〇年代でしたが、あらゆる科目の一つの根本的な問題は、なぜドイツは戦争を起こしたか、なぜドイツ人はユダヤ人を殺したか、これは高等学校、大学のときでも、

先生方とわれわれ生徒の一つのテーマでした。したがって高等学校の時代から、ドイツの文化、ドイツの社会に対するかなり批判的な態度——ということは適當でないかもしれないが、なにか距離をおいて、ドイツ人であることはいいことだけじゃなくて、ある程度罪人だという意識が強かったのです。それを超えて新しいドイツをつくらなければならぬ。いづれにしても自分の文化から解放されることは当然できないけれども、やること学ぶべきことはいっぱいある。ですから、否定的なことを乗り越えて新しい文化と新しい社会をつくらなきゃという意識がとても強かったのです。私はそういう教育の世界で育ったものとして、高等学校と大学の時代にはじめて夏休みにオランダ、フランス、イギリスへ行ったとき、おまえはドイツ人かといわれました。このおまえはドイツ人かということは大変なことでした。当時ドイツ語のよくできるフランス人、イギリス人でも、絶対ドイツ語をつかわなかったわけです。ドイツ人であることは大変であるとの意識はいまでも残っております。

たぶん国際交流の一つの前提は自分の国、

自分の文化、社会に対する根本的な態度、だから自分の国を愛しながらこういう批判的な態度をもつことがいちばん重要じゃないか。これはもちろんドイツで戦後はじめてそのような態度が生まれてきた。そしてドイツ人が自発的にそういうことを発見したというよりも、ドイツはヨーロッパの真ん中の一つの国ですから、外からいろいろなことをいわれてそこでよく勉強したわけで、それはたぶん私の世代と次の世代だけで、いまの若い人はまたちがうと思います。もちろんこれも正直に言わなければならぬ。けれども、同志社のなかでも、キリスト教の大学でキリスト教の学校であるにもかかわらず、そういう超越的な立場に立って自分の国を見る人は少ないなという気がします。

北垣 たいへんいい発言をしていただいてありがとうございました。国際交流ということも、しっかりと自分の主体性をもって受けとめる、いまおっしゃいましたキリスト教あるいは宗教的な光に照らしてみても、自分自身と自分の国を愛しつつもそれを批判できるといふ、より高い立場が最終的には必要になつてくるというわけだろうと思います。深みを

与えていただいたと思っております(笑)。ありがとうございました。

岡田 日本人全体を客観視するとか、日本の文化全体を客観視するとかいうことは、個々の学生さんに要求しても、これはなかなか大変だろうと思いますけれども、少なくとも自分の行動のどの部分が日本人的だとか、たとえば駅なんかで外人さんに触れ合っても、あるときには変だなと思ったり、カッとしたりするでしょう。そういうときに自分のどの部分が日本人的な反応だとか、自分の行動そのものがわかるようになったら、これは人生全体で非常に大きなプラスだと思うのです。そのためにはやはり異質な民族との接触というものがいちばん早わかり——ということおかしいですけれども、アメリカのティーンエージャーは、だいたいあの国自身が異民族が入り混じっているために、アイデンティティ・クライシスと一般にいわれるティーンエージャーの典型的な一つの過程があるわけで、そのなかで日系人は、日系であつてしかもアメリカ人というのは何だろうかと思ひながら、そのプロセスが日本のティーンエージャーにはないですからね。こ

れはやはり国際教育みたいな場所です。アイデンティティ・クライシスにかわるような教育プロセスをふんでいかないと、自分自身を客観視することのできない人間ができてしまうと思うのですよね。

石田 自国文化がわからなければ異文化がわかるはずがないですね。いま岡田先生がおっしゃったように、自分の国とか自分の文化を批判的に見る目というのは、これは非常にだいじだと思うのです。だけど、私自身も含めて、日本の文化の本質とか、日本文化のありようとか、そういったものをどの程度ほんとうに知っているかという、とくに若い人たち、私たちが接触している学生たちという話をしていますと、なまはんな外国の知識よりもはるかに日本に対する認識度とか知識はずっと少ないですね。国際交流の基本というのは、やはり異文化同士が接触し合って、そのなかから何かより高い次元の文化が創り出されていくことだとすれば、まずいまわれわれで欠けているのは、外ばかり見る一方的な国際交流に対して、もう一度内側を見るという姿勢がどこかで組み入れられてないと、国際交流がどこかいびつなものになるの

じゃないかという気がしますね。

岡田 広い知識をもたなければだめだなと考えさせるような場所の欠如じゃないかと私は思うのですけどもね。教室のなかでも必ずしも考えなくてもいいような教室が多すぎて、自分の文化についても考えざるを得ないという場所をどうしたらつくれるかということだけれども、その一つにやはり異質な人たちとの接触ということがあって、これは自分のレベルで考えざるをえない。尋ねられてどう答えていいかわからないような場所、困るような状況をつくってやるのが教育としては必要で、ちっとも困らない、悩まない、楽チンで、何年間か坐っていればなんとかなるでは、これは知識欲も何も起こらないですからね。

小浜 かえって私どもの学生のほうが真っ先に異文化を吸収してきているわけですから、帰ってきて日本文化を吸収したいという気持ちには強くもっているのです。それで英語でもって日本文化を帰国生に知らせるというプログラムをしているのです。

先ほど岡田先生がおっしゃったアイデンティティの問題ですが、フランスに長くいた子

が帰ってきて、ある日東京で道を訊いたら、おまわりさんがそこから右へ行っとうとかややこしいことを教えたらしいですね。そうしたら結局それがわからなくて、歩きだしてからもう一度おまわりさんのところへ行っって訊き直したら、おまわりさんが変な顔をしたというのです。というのは、結局みえ形は全然日本人なわけですから、この子は日本語の会話もできるのにどうしてわからなかったのかなと変な顔をしたですね。それまでは非常にフランスが好きでしたが、このことがあってから、どうしてもアイデンティティをはっきりさせたいと思って帰ってきて、国際高校に入ったという子もおります。そういう意味で私どものほうの学校でも、ぜひぜひ日本文化をいろいろ教えてやりたいと思うのです。

先ほど外人と接触することをじゃまくさがる人があるというお話が北垣先生からありましたけれども、やはり海外とかあるいは異文化に接触した人は、そのじゃまくさが非常に少なくなってしまうし、私は海外から帰ってきて驚いたのは、若い方たちが、いま石田先生がおっしゃったように日本文化というもの

をあまり知らない。けれども非常にコンフィデンスをもっていきますね。日本国というものに対して非常にプライドをもっていていると思うのですね。だから若い先生方のなかには日本ほどえらいものはないという気持ちがあるのか、ここにあるような人もありますし、その点、私は帰ってきて自分が浦島太郎のような感じがして、日本はそんなにえらいのかなと思っただけがあります。ですからそういう点で、シュベネマン先生がおっしゃったように、もっともって日本の悪い点も反省させていかなくちゃいけないのだけれども、最近はどうも反対の方向へ進んでいくようで、このままではどうなっていくのかなという懸念もあるのですけど。

さまざまな構想

北垣 東南アジアの人々が、現在これだけの設備をもっている全同志社にはわりあい少ないわけですね。そして新島基金から奨学金を出して受け入れる準備はあるわけですが、それでも国立大学、とくに京都大学の何分の一という状況だと思います。同志社はもっと東南アジアに対して目標を定めるべきである

というふうにお考えになるでしょうか、その辺いかがなものでしょうか。実は東南アジアに対してどういうことができるのか、日本語学校ももたないでいて、さあどうぞ来てくださいと言つことも言えませぬ。日本語の教えられる設備なしにはそんなこと言つたって、いまの状況ではしようがない。けれども新機軸ということになると、同志社のなかに日本語のみならず、もっともって英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語、その他をこれから教えられるようにもっていくしかないのじゃないかと思うのです。

私、ハーバード大学で一九七六年の卒業式のときに総長が演説して、現在ハーバードでは五十カ国語——と言つたと思うのです——を教授しているというのです。そして来ている留学生の出身の国は九十何カ国であると言つたと思います。そこまで同志社はもっていかれるとは思いませんが、しかしお隣の朝鮮の言葉すら教えることをしていない。中国語はやっているけれどもなかなかものにならない。これが現状でして、二十一世紀向けに考えるならば、そういう意味での真剣な語学教

育のセンターのようなものをつくっていかなければならぬのじゃないかという気がいたします。

岡田 できることからやったらいいのじゃないかと思ひます。たとえば東南アジアから先生方呼んでこようと思えばできるのじゃないでしょうか。だから必ずしも日本語学校ができてからでなければ東南アジアとの交流ができないわけでもないでしょうし、東南アジアをどういうふうに組み込んでいくか、私はここで言えることは、将来の目安をもつ少し真剣に考えていく時期が来ている。必ずしも学生さんをつれてこなければいけないこともないし、こちらから行つてもいいわけですから、いろいろな形がありうるので、それは将来の問題ということじゃないかな。

北垣 もう一つは、現在の同志社大学のありように失望している方々のなかから、田辺を標準におきまして、これから討議がつくわけですけれども、いつそのこと同志社国際大学をつくれというような発言も出ております。そのビジョンがどういうものであるかということは聞いておりませんけれども、もしも国際大学というものが構想されるのであれ

ば、やはりそこでは、先ほどから話が出ました日本語を含めての言葉の研修所というものがその三分の一くらいの機能を占めなければならぬと思うし、それは小型の大学で大いに結構だと思うのですけれども、そこに入ってきた人は、外国人と接触することをじゃまくさらないような、そういうメンタリティーにだんだんもっていく。そして自分の文化もわかり、すすんで外国へ出ていける、というような教育がなされるべきじゃないかということ 생각합니다。しかしそれは言いやすく、実行はしにくいことでありまして、それではだれが中心になってそれを作っていくのかということになりますと大変な問題であります。

シュペネマン いまの反対の方向を考えると、むこうの留学生をこちらへ呼ぶということだけでなくて、こっちの人に行ってもらう。一年行かせるのはちょっとむづかしいかもしれませんがそれでも、たとえば東南アジアのサマー・プログラムができないだろうか、三週間くらいグループに分けて、ある国へつれていきその国で経済的・社会的に安定している人たちとの接触よりも、たとえば一週間か十日間そのスラムで働いて、また非常に

庶民的な家庭生活の現場に入って、そしてあとで地元のどこかの大学で先生の授業をうけて、その国の立場からいまの日本を見るとどうであるか、というような話を聞く。これはいい経験だと思います。その人たちがこっちへ帰ってくると、やはり何か残るかもしれません。少なくともそれは刺激になります。勉強にも刺激になります。そしてこういうことは、将来就職してどこかの会社で仕事をするときに、やはり少しは残っていると思います。アメリカとはもちろん歴史的な事情もあります。アメリカだけでも、いまの国際交流の場合はこの種の問題はほとんど出てこない。ですから、それをこれからもう少し考えるべきじゃないかと思えますね。

小浜 なにか寄付講座みたいなものを国がやっておりますね。つまり先生がその学校へ教えるに行くわけですね。その国はお金を払わないわけですね。日本側で払う。その講座と先生がともに行くわけですね。それでむこうの人たちと接触をし、高校生あるいは大学生をこちらへよこす。そういう方向へもっていくこともできるのじゃないか。寄付講座ということですが。

北垣 移動チェアですね。

小浜 いろんな良いことをお考えになつていらっしゃる先生方が同志社にはおられるのだし、そういう方々がぜひ集まってやっていただきたいと思えますね。

石田 大きな構想はいろいろあると思うのですけれども、周辺の小さなことで、当然やられていいことがまだやられないままに残っていることがあると思うのです。たとえば同大の場合は知りませんが、外国の大学で取得した科目の単位認定というの、もう検討すべきでしょうね。そういう細かいことをまず埋めていかないと、そういうことを残したままで大きなプロジェクトを考えようとしても、結局は宙に浮いてしまうことになりかねませんね。

シュペネマン それは考えていますよ、とくに大学の場合は、派遣でなくても留学生の場合に単位認定とか、これはいま熱心に考えて、近い将来に具体的な提案が出るようですよ。

岡田 小さいことではいえないくらいでもあると思います。いま東南アジアの話が出ているけれども、現に東南アジアから学生さんが来

ているわけですね。そういう人たちをもっと利用してもらう方法も、クラスへ呼んでくる試みとかいろんなことをやっていらっしゃる先生が個別にはありますけれども、そういうものを助成するというか、励ましていくというか、そういうお膳立てのような事はすぐにもできる。そんなにお金もいらない。AKPの学生さんも来ている。あれをもっと上手に利用すればいいわけで、だから必ずしもお金がかからない方法で、日常レベルでもっとやっていたりすることがあるのですね。

石田 そうですね。しかしそれはあくまで個人でやっておられることですね。

岡田 それをもっと上手にお膳立てしていくというか、励ましていくというか、それには多少は場所の工夫とかしなくちゃいけないかもわからんけれども、そういう方法もあると思う。

津田 先ほどのお話で、同志社というのはわりとアメリカとの交流はあって、アジアとか、アフリカとか、ヨーロッパとの交流はあまりないのじゃないかという感じがするわけですね。さっきの語学については、ぼくは専門じゃないからわかりませんが、ぼくはドイツ

ツに行くときに、ゲート・インスティテュートでみっちり仕込まれたものなんですけれども、ああいうシステムはほんとに語学力が身についたと思うんですね。日本の大学でいくら教養のドイツ語をやられても、全然……。ただ、ああいうシステムは、ぼくはあれがいちばんいいとは思いませんけれども、やはり見習うところがあるのじゃないか。日本語の学校にしても、二カ月で修了するような学校が全寮制であると。

岡田 学生さんは何名でしたか。

津田 ぼくのとときは二十何名です。ぼくはよく日独協会とか、あるいは日仏とかに顔を出して、いろんな演奏家を同志社大学で使ってもらうわけですけれども、この前の会合へ行っても京大の先生ばかりなんです。同志社の先生はなかなか参加しておられない。学者とか演奏家とかいろんな意味でできるなと思っているわけなんです、そういう意味でアメリカのみならずいろんなところとの交流は、やはり研究の面でやったほうがいいのじゃないかと考えております。

北垣 ありがとうございます。きょうはお忙しいところを雨のなかお集まりいただき

まして、「時報」のためにそれぞれたいへん結構な有意義なご意見をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。これで終わらせていただきます。

(一九八二年七月十三日収録、於同志社有終館第二会議室)

